

特集 **見えにくい孤立と貧困**

2～5面 「置き去りにされる女性たち」

寄稿・飯島裕子（ノンフィクションライター）

6面 名古屋YWCAのセーフ・スペース

7面 被災地・被爆地の高校生平和大使

「コロナ禍のなかの 女性たち」

2年続いたコロナ禍は、女性たちの苦しみをより色濃くした。

同時に、女性たちの置かれている状況をあらわにもした。

今、起きている現実を受け止めて、

できることを真剣に考えよう。

コロナ後、あらゆる人が生きやすい社会へと変えていくために。

The Young Women's
Christian Association

YWCA

2

FEBRUARY
2022

No.766

〈第33総会期主題聖句〉

平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

〈ビジョン〉

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

〈ミッション〉

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉

キリスト教基盤 平和・環境 人権 セーフスペース

www.ywca.or.jp

置き去りにされる女性たち

コロナ禍があまり出す孤立と貧困

ノンフィクションライター 飯島裕子

女性たちに何かが起きている――。長年にわたり女性や少女の貧困問題取材しているノンフィクションライターの飯島裕子さんは、2年前の春、いち早く異変に気が付いた。まだ「コロナ禍」という言葉が広く認識されていなかったころだ。それから今日まで、コロナ禍の影響を受けて追いつめられていく女性たちを訪ね、その声を聴き続けてきた。取材から見えてきたことを共有していただこう。



2020年11月、東京都渋谷区のパス停で60代のホームレス女性が男性に殺害されるという事件が起きました。それから1年。困窮し、炊き出しの列に並ぶ女性の数は増えてきています。これは2008年のリーマンショック後の不況時には見られない現象でした。コロナ禍で女性たちに何が起きているのか？とりわけ可視化されづらい女性の貧困について考えてみたいと思います。

シャドウパンデミックと深まる女性不況

コロナ禍の影響は男性より女性に色濃く現れているということが、次第に明らかになっていきます。

ステイホームが長引くことにより、家庭内暴力(DV)や虐待が増加。国連のグテレス事務総長はこれを早い段階で「シャドウパンデミック」と呼び、各国政府に女性と女兒をコロナ対策の中心に据えるよう求めました。日本政府もSNSやメールによるDV相談窓口を増やすなどの対応にあたり、通常時の1・5倍ほどのDV相談が寄せられています。

私が取材を通して出会った女性の中にも、夫の在宅勤務が決まった日に子どもを連れて家を出たという人がいます。数年前からDV被害にあいながら逃げる決断ができずにいたのですが、「夫と毎日顔を突き合わせるようになっていたら殺されてしまうのではないかと

いう思いが頭をよぎった」と言います。しかし彼女のように支援にたどりつける人はごく一部であり、この数字は氷山の一角であると言うことができるでしょう。

さらにコロナ禍による失業や雇止めは、非正規雇用の女性に集中していることも分かってきました。この状況を、経済不況を指すリセッション(recession)になぞらえて「女性不況(shecession)」と呼ぶ経済学者もいます。2020年、非正規女性は前年度比65万人減と非正規男性32万人減と比べても大幅に雇用を減らしています。これは感染拡大を防ぐため休業を余儀なくされた飲食や宿泊、対人サービス業などで働く非正規女性の割合

が高いことと関連しています。

コロナ禍の影響で休業に追い込まれた場合、休業手当が受けられるのですが、雇止めやシフト減を経験した非正規女性のうち、これを受けた人は2割にとどまっています。休業手当は正規・非正規に関係なく受給できるものです。しかし雇い主として本人もその事実を知らない、または「家計補助的に働く非正規女性だから」と軽く扱われている場合もあるかもしれません。しかし非正規で働く人の中にはシングル女性や主たる生計者として家族を支えている人もいます。こうした状況が、コロナ禍以前からあった女性の貧困に拍車をかけていると言うことができるでしょう。

また、コロナ禍による一斉休校やステイホームの影響で、女性の家事労働やケア負担が増えています。エッセンシャルワーカーと呼ばれる存在にもわかに注目が集まりました。看護・介護・保育士、スーパーの店員などのエッセンシャルワーカーにおける女性比率は高いのですが、非正規で低賃金である場合が少なくありません。緊急事態宣言下でも社会を支えるため、働き続ける女性たちの姿がありました。しかし「感謝」はリップサービスにとどまり、待遇引き上げなどには結びつき



シングルマザーを追い込む 休業、退職、収入減の現実

ませんでした。

コロナ禍で多大なダメージを受けた女性の中にシングルマザーがいます。シングルマザーの多くは働いているにもかかわらず、コロナ禍以前から貧困率が高い状態が続いていました。仕事

とワンオペ育児に追われるシングルマザーにとって一斉休校によるダメージは大きく、NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむによるアンケートでは、約7割のシングルマザーが雇用と収入に影響が及んだと回答しています。また3割が一斉休校の影響により、休業や退職に追い込まれていたことも分かりました。

私が取材した女性も、感染への恐怖から介護士の仕事を辞めてしまった一人です。DV夫から逃れるため、知り合いのいない土地でひとりで子どもを育ててきた彼女は「自分がコロナに感染したら子どもはどうなってしまうのか？」という不安に苛まれたと言います。現在はNPOとつながり、食糧支援を受けていますが、物質的な側面のみならず、精神面でのサポートもあるといいと感じます。

困難な状況が続く中、シングルマザーの当事者団体などが声を上げたことにより、政府による追加給付が行われるなど、十分とは言えないまでも、ひとり親世帯の貧困は可視化され、政策課題の一つになってきています。

また昨年には「生理の貧困」という言葉が拡散することによって、生理用ナプキンを購入することができない大学生など、若年女性の存在がクローズアップされました。その後、地方自治体で生理用ナプキンが無償配布されるなどの動きが広がっています。

この動き自体を否定するつもりはありません。しかし生理用品を購入することができない女性は多くの場合、他の生活必需品も購入できない貧困状態にあるはずです。「生理の貧困」のみが単独で存在するのではなく、その背景には当然のことながら、「女性の貧困」があるのですが、女性が貧困に陥りやすい社会構造に踏み込み、根本的な解決策を目指す方向には進みませんでした。ナプキン配布をきっかけに女性たちの生活状況を聞き取り、必要な場合は生活保護申請につなぐといった一歩踏み込んだ対応をしてほしかったです。

とはいえ、ほとんど取り上げられることがなかった生理の問題や若年女性の貧困の実態が知られるきっかけになったという点では、意味があったと言えることができるでしょう。

完全に取りこぼされる シングル・中高年女性

シングルマザーや若年女性など、少しづつ可視化され始めている女性の貧困ですが、一方で完全に取りこぼされています。それはシングル女性と中高年女性です。シングル女性の貧困率は高く、働いていても3人に1人が貧困状態にあります。また女性の貧困率は高齢になるにつれて上昇していき、65歳以上のシングル女性の貧困率は50%を超えています。

シングル女性が貧困に陥りやすい背景には、女性が自立して生きていくことが困難な日本社会の抱える問題があります。女性の非正規雇用率は非常に高く、男女間賃金格差も立ちはだかります。女性が親や夫から離れ、ひとりで生きていくのは容易なことではありません。それでも慎ましくも堅実に生きていく女性たちはいますが、経済的基盤が脆弱なため、コロナ禍のような

不測の事態が起こった際、ダメージを受けやすいのです。

取材で出会ったある女性は憧れだったバリスタの仕事に就き、一人暮らしを謳歌していました。しかしコロナ禍で仕事を失い、アパートの更新料が払えなくなり、実家に戻らざるを得ませんでした。実は彼女には義父から性的虐待を受けた過去がありました。その記憶がフラッシュバックし、耐えられなくなった女性は実家を出て友人の家を転々とするようになります。

全国の自治体にはDV被害にあった女性たちが利用できる婦人相談所の一時保護所や婦人保護施設がありますが、経済的に困窮して家を出た女性たちが身を寄せられる施設は多くありません。こうした施設で受け入れる自治体もありますが、あくまでもDV被害者が優先です。大半の施設ではDV被害者を守るため、携帯電話やインターネットなどが利用できません。経済的に困窮している女性の中には仕事をしている人や一日も早く仕事を探したいと思っている人も多く、携帯のない生活は考えづらいのです。前述の女性は父親からの虐待を理由に婦人保護施設への入所を認められましたが、外部と連絡が取れなくなることから入所をためらっていました。

DV被害にあった既婚女性のみならず、たとえば経済的に困窮したシングル女性や家族間トラブルから逃れてきたセクシュアルマイノリティなど、さまざまな理由からステイホームできない人たちが安心できる居場所をつくることが求められています。

コロナ禍で高齢女性の状況が深刻化しています。新型コロナウイルス感染症は高齢者ほど重症化しやすいことからひきこもり生活を余儀なくされている人も少なくありません。

一方、年金収入が乏しいため、感染リスクに晒されながら仕事を続ける人たちもいます。厚生年金がもらえたとしても現役時代の賃金が反映されずから、もともと低賃金の女性は少ない年金額しか期待できないのです。

今も現役で保育士を続ける70代後半のシングル女性は40年以上厚生年金保険料を払い続けてきましたが、現在の年金額は10万円もありません。税や社会保険制度は「夫婦と子ども」という標準世帯を基本として作られているため、「想定外」の存在であるシングル女性にとって不利な制度となってしまうのです。

また高齢者にはインターネットを利用しない人が多く、コロナ禍において必要なサービスや情報にアクセスでき

なかったり、孤立しがちであることに注意が向けられるべきでしょう。

世代や未婚・既婚といった軸で女性を分断するつもりはありませんが、最も声が届きづらい層を取りこぼさないよう、常に耳を澄ませている必要があります。

女性たちが分断を越え 共に手をたずさえて

困難な状況が続く中、一体私たちに何ができるのでしょうか？

コロナ禍によって以前から存在した女性の貧困があらわになりました。発想を転換し、可視化された今こそチャンスと捉え、困難な状況に置かれた人を一人も取りこぼさない気概で解決に向けて踏み出すべき時であると考えます。

夫の在宅勤務が決まった日にDVから逃げる決意をした女性、緊急事態宣言下でネットカフェが閉鎖されたことから生活保護につながった女性――適切な支援者の存在が不可欠ですが、コロナ禍をきっかけとして新しい人生に踏み出した人もいます。

冒頭に記したホームレス状態にあった女性が殺害された事件から約1ヶ月後、渋谷の街で彼女を追悼するデモが



あわせて
読みたい！



『ルポ コロナ禍で
追いつめられる女性たち』
飯島裕子 著
800 円 + 税 / 光文社新書

本特集のきっかけとなった一冊。さまざまな女性たちの事例を丹念に取材し、制度上のほころびや構造的な問題に踏み込み、社会のあり方を問う。女性のステータスによって生じる支援の差、見過ごされがちな氷河期世代の孤立や高齢おひとり様の貧困など、ニュースが伝えきれない過酷な現実にはッとさせられる。ぜひ一読してほしい。



profile

飯島裕子
[いいじま ゆうこ]

東京都生まれ。東京女子大学、一橋大学大学院修士課程修了。専門紙記者、雑誌編集を経てフリーランスに。人物インタビュー、ルポルタージュを中心に『ビッグイシュー日本版』などで取材、執筆を行うほか、大学講師を務める。著書に『ルポ 貧困女子』（岩波新書）、『ルポ 若者ホームレス』（ちくま新書）など。ビジネス誌やニュース誌のオンライン版などに多数寄稿。横浜 YWCA 評議員。

Yahoo! ニュース個人
[https://news.yahoo.co.jp/
byline/ijimayuko](https://news.yahoo.co.jp/byline/ijimayuko)



行われました。そこに集まった女性たちの多くは「彼女は私だ」という言葉を口にしていました。程度の差こそあれ、コロナ禍による影響を受けなかった人はいないでしょう。「彼女は私だ」という当事者意識と他者を自分のことのように思う想像力は世の中を変える力になります。

女性どうしが分断を乗り越え、知恵を出し合い、手を取り合うことで、女性が一りで働き、生活し、生きることすらままならない現実を変えていかなければならないと感じています。



名古屋YWCAのセーフスペース

孤立しがちな女性たちをつなぎ、共につながる

コロナ禍で孤立しがちな女性たちをサポートする名古屋YWCAの「ナゴ女*つながる」。2021年10月から今年3月2日までの期間限定の事業だが、この間さまざまな女性たちとの出会いから大切なことが見えてきた。

不安を抱えた女性が
安心できる居場所

水曜、金曜、土曜の夕方、名古屋YWCA会館2階のロビーは装いを変える。いすにクッションが置かれ、雑誌や写



スタッフが心を尽くしてもてなす「ナゴ女*つながる」

真集、マンガなどが並ぶ書棚やハンモックチェアが出され、カウンターにはさまざまなお茶、お菓子、軽食が並び、ポータブル・スピーカーから音楽が流れる。この後3時間、女性のためのセーフスペース「ナゴ女*つながる」がオープンする。

「つながる」は、名古屋市の委託を受け、コロナ禍において一人で困難や不安を抱える女性のためサポート事業として実施している。一人でも居心地よく過ごせる「ホットスペース」、フェミニストカウンセラーによる個別相談、社会と人とのつながりをつくるための講座とプチレッスン、オンラインのプログラムの開催、女性用品の無料配布も行う。女性ならば誰でも無料で利用できる。

こういうことを
相談してもいいの？

事業の準備段階では、困っている女性が夕方から夜の開催時間に来られるのだろうかと思っていた。しかし開始すると、



自由に使える編み機を用意。教え、教わり、会話が生まれる

初参加を含めて毎回10名を超える人が訪れた。初回にアンケートを任意で記入してもらったのだが、年代は10代から70代、約半数が30代から40代である。仕事については無職、非正規、パートの方がこれも約半数。不安に感じていることは、生き方、こころの健康、将来についての割合が高い。また予約制の個別相談（1回3枠）は、ほぼ空きなく埋まる。予約なしで行う「ホットスペース」でのプチ相談の利用もあり、「どこに相談して良いかわからない」「こういうことを相談していいかわからない」と相談につながらない人が多くいることが見えてきた。

同じ女性として
参加者と共に

女性たちとの出会いで分かってきたことは、世代を問わず、人や社会とのつながりが薄れると情報を得ることも難しくなり、なお孤立していく状況にあることだ。「最新情報はSNS（インスタグラム・ツイッター・フェイスブック）で」という当初の広報では、情報が届かない人がかなりいることが分かり、紙媒体の必要性も認識した。また「女性だけで安心できる場所」「人のいる場所であつくりできること」のニーズが高いことは、

どれだけ女性が社会や家庭の中でがんばり続けているかという表れである。こうした気づきから「つながる」の取り組み方針に、「支援者は現代の社会で同じ女性としてのジェンダー格差の中で生きる者としての経験と連帯の気持ちを持ってサポートする」を入れた。

「ホットスペース」では織り物や折り紙など「手しごと」も楽しめる。参加者と支援者が共に作業をしながら、時には参加者から教わり、完成を共に喜ぶ歓声が上がる。もちろん参加者が抱えている困難を把握し、適切な対応をすることが支援者の役割だが、セーフスペースで共に時間を過ごすことも大切なサポートなのだ改めて感じる事業である。

名古屋YWCA 担当職員 吉澤道子



一人で過ごしたい人の思いも尊重

被災地・被爆地の高校生平和大使が語る

平和への想いを 等身大の言葉で伝えたい



延期されていた結団式で対面した
佐藤麻友華さん(右)と大内由紀子さん(2021年12月)

私たちにもできることがある

この日のメインスピーカーを務めたのは、第24代高校生平和大使で福島県在住の高校2年生、佐藤麻友華さん。6歳で

日本YWCAの東日本大震災被災者支援の拠点「カーロふくしま」では、「福島わたしが呼びかける平和への想い」と題して「おはなし会」を開催。核兵器のない平和な世界の実現をめざして活動する高校生平和大使の二人が、熱い想いを語った。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故にあい、常にマスクを着け、外でも遊べず、食べ物にも気を使う日々を体験している。小学5年生のとき、原水爆禁止世界大会に参加するため家族で長崎を訪れた。街に残る原爆の爪痕や被爆者の話から、原子爆弾の恐怖を知り、「原発・原爆のように人の手によってコントロールできないものをつくってはならないと強く感じた」という。

中学校での平和活動を通じて戦争や原爆について考えるうちに、自分にもできることはないかと思い、高校生平和大使

に応募した。周りの友人たちは平和活動を他人事と捉えているが、「私にもあなたにもできることがあると優しく教えてくれた」。被災地福島に住む一人の高校生として「原発事故の経験や平和への想いに熱意をのせて、不格好でも等身大の言葉で伝えていきたい。熱意は伝わるはず」と語った。

平和の連鎖を広げたい

「おはなし会」にはもう一人の高校生平和大使がゲスト参加した。広島県在住の高校2年生、大内由紀子さんだ。やはり小学生のとき訪れた広島平和記念資料館で被爆瓦や溶けた金属を見て衝撃を受けたという。平和記念公園での「子ども碑めぐりガイド」などの平和活動歴があり、平和大使に応募したのは、国連に派遣された高校生平和大使の報告会見の様子を新聞で知り、活動の幅を広げたいと考えたからだ。「誰かの想いや行動が、他の誰かを動かす。私の取り組みもまた、周りの誰かのきっかけになって平和の連鎖が広がってほしい」。

「私たちにできることは、まず知ること」という由紀子さんは、被災地である福島について「まだどこか遠く感じているので、福島の方々の生の声を聴いて真実を知りたい」という。一方で、被爆地広島に住む高校生の立場から「唯一の戦争被爆国として日本政府に核兵器禁止条約の批准を求め、核兵器保有国にもア

ピールしていきたい」と決意を語った。

ビリョクだけどもリョクじゃない

高校生平和大使の任期は1年。二人は昨年8月の結団式で全国の平和大使と会い、活動を本格的にスタートさせるはずだったが、新型コロナウイルス感染拡大のため結団式は延期となった。スイス・ジュネーブの国連欧州本部に集めた署名を届けることも叶わず、大きな目標を失い、心が折れかけたが、「ビリョクだけどもリョクじゃない」と学校や街頭で署名を呼び掛けるなど、それぞれの場所ですubject的に活動が続いている。

世界YWCAの事務局は国連欧州本部と同じジュネーブにあり、例年、高校生平和大使たちが表敬訪問に立ち寄る。「核」否定の思想に立ち、戦後一貫して非核・非戦を訴え続けてきた日本YWCAとして、彼女たちの活動を後押しし、平和のバトンをつないでいきたい。(2021年11月27日に実施)

編集部

高校生平和大使とは

ヒロシマ・ナガサキの声を世界に伝え、核兵器のない平和な世界の実現をめざす高校生の平和運動。「高校生1万人署名」を集め、国連欧州本部へ届けている。1998年に始まり、毎年公募で選ばれる。2018年、ノーベル平和賞にノミネート。

エンパワーするNGO



一人じゃないよ

と伝えたい



すべての人に「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」が保障されているはずのこの国で、仕事や家を失い、日々の暮らしに事欠くほど困窮し、社会的にも精神的にも孤立する女性たちが増え続けている。「女性活躍」を高らかに謳ってきた日本社会で今起きているこの現実、女性が経済的に自立して生きていくことを困難にするジェンダー格差の根深さを明らかに示していると思う。また、コロナ禍によって社会保障や公的な支援制度等のさまざまな問題があまり出された。あらゆる人が自分らしく豊かに生きることを可能にするために、社会の仕組みはどのようにあるべきか、知恵を出し合い、声を上げていきたい。

一方で、さまざまな場面で物理的な制約を強いられたこの2年間に、多くの地域YWCAが、困難を抱える女性や子どもたちのためのセーフ・スペースづくりや物心両面の緊急支援を試みてきた。地域に開かれた小さな場でのつながりが、誰にも助けを求められない、孤立した状況を変えていくきっかけになるかもしれない。かき消されている小さな声にアンテナを張り、「一人じゃないよ」と発信し続けていくことが求められている。

編集部 清田悦子

ご協力ありがとうございます

賛助費

秋元靖子 阿部幸子 五十嵐和子
池上幸子 井澤浩一 石川松子
磯村美保子 井田すみ 板橋幸子
板橋俊子 井上玲子 上村愈巳子
臼田治子 宇都宮芳子 江尻美穂子
遠藤真理 筑川光郎 織田光恵
小野寺富子 小原尚子 片山恵
兼子佐与子 加納美津子 上遠恵子
河越良子 河津百合 河村富雄
河村千恵子 桐村巨子 熊江雅子
古藤春世 小林喜美子 阪本和子
汐崎康子 設楽順子 柴田恵子
下村昭子 庄子泰子 杉田佐紀子
関根祐子 高木博己 田中綾
田中唯彦 田中倍子 辻井夏子
土屋幸子 手島弘美 寺嶋公子
戸枝孝子 常葉俊子 徳永明子
得永道子 外崎弘子 富沢寿美子
富田直美 中尾眞三子 中島美登里
永山峰子 野澤節子 野呂幸子
旗眞紀子 畑山みさ子 東根順子
比企敦子 笛木直子 藤野尚子
牧南 益田明美 三股恵美子
三股まさ子 宮内貞子 三宅文子
宮澤玲子 宮本政明 毛利亮子
桃井明男 森島子 森山和子
八木高子 安田寛子 八村悠紀子
山田久美子 山中光子 吉岡都子
芳川雅美 吉田亜希 吉野恵子
依田良子 淀川敬子 李初容
渡部静子 医療法人三芳会
学校法人まきば幼稚園
日本バプテスト連盟大村古賀島キリスト教会
日本基督教団田園調布教会

ピースメーカー募金

(平和を創り出す女性のリーダーシップ養成)

青木恵子 井口諭 池上幸子
石原艶子 板橋俊子 伊藤悦子
伊藤恵子 井上玲子 臼田治子
内山康一 宇都宮芳子 梅林宏道
江崎啓子 遠藤真理 尾崎哲則
小原尚子 片山恵 木本洋
京野洋子 桐村巨子 久我輝子
糸みち代 能江雅子 郷原静江
郡恭子 古藤春世 小宮一子
小村明子 齋藤知弘 阪本和子

柴田幸子 清水靖子 清水嶋洋子

清水嶋孝 庄子泰子 杉田佐紀子
武井真美子 武内富貴代 田中京子
田中唯彦 旦節子 辻井夏子
鶴崎祥子 手島千景 戸枝孝子
得永道子 鳥海百合子 長尾眞理子
中尾眞三子 中平多恵子 仲谷利理
西田悦子 野崎誠一郎 野々村耀
野呂幸子 馬場順子 比企敦子
坂内義子 東根順子 比企敦子
平石あつ子 笛木直子 福田公子
藤谷佐斗子 藤田雅子 藤野尚子
堀内洋子 牧由希子 益田明美
松下真佐子 三股恵美子
三股まさ子 宮内貞子 宮澤玲子
宮本久子 宮本政明 毛利亮子
桃井明男 八木高子 安田寛子
山田久美子 渡辺寿美子
女子学院 宗教部
日本基督教団滝野川教会
日本基督教団滝野川教会
新湯 YWCA
匿名

災害時支援募金

(オリブの木キャンペーン募金)

アカザフミユキ 東生野 栗野智子
石井敬子 板橋俊子 市川真美恵
井上玲子 今泉典子 上村愈巳子
臼田治子 江崎啓子 榎本みつ枝
遠藤真理 小笠原公子 小原尚子
小淵眞理 片山恵 川口武宣
川口文子 北原恵美 桐村巨子
久我輝子 糸みち代 熊江雅子
桑原貴子 小泉陽子 神門佐千子
古藤春世 小宮一子 小村明子
阪本和子 佐々木洋子 佐藤清子
佐藤礼美 重松よし子 下村昭子
庄子泰子 杉田佐紀子 関根祐子
添野ふみ子 谷内基子 田林綱紀
張善花 月原綾子 辻井夏子
鶴崎祥子 鶴長美樹子 手島千景
寺嶋公子 得永道子 富岡美知子
富田直美 鳥海百合子 中尾眞三子
西田悦子 野崎祥子 野々村耀
林育一郎 東根順子 久宗百合子
福田公子 毛利亮子 三股まさ子
宮本政明 毛利亮子 桃井明男
安田寛子 山岡清二 善沢志麻
淀川敬子 渡部静子 和田博子
学校法人まきば幼稚園
匿名

(国内外の災害被災者支援)

高屋陽子
日本キリスト改革派東京恩寵教会
日本バプテスト女性連合

ガザの子どもプログラム支援募金

原紀子

東日本大震災被災者支援募金

赤川恵子 秋元靖子 池上幸子
板橋俊子 伊藤恵子 井上玲子
上村愈巳子 臼田治子 宇都宮芳子
江崎啓子 榎本みつ枝 遠藤真理
太田ゆかり 織田光恵 小野寺富子
小原尚子 片山恵 加納美津子
木本洋 桐村巨子 久我輝子
糸みち代 具島美佐子 朽木美奈子
熊江雅子 桑原貴子 神門佐千子
郡恭子 古藤春世 小宮一子
小村明子 齋藤知弘 阪本和子
佐藤清子 清水靖子 下村昭子
首藤和子 庄子泰子 杉田佐紀子
杉野孝子 杉原壽子 杉本陽子
関根祐子 田中甫 玉生邦子
手島千景 得永道子 外崎弘子
鳥海百合子 長尾眞理子
中尾眞三子 中村とよ子
中村みゆき 西田悦子 仁平のぞみ
野崎誠一郎 野澤節子 畑山みさ子
東根順子 比企敦子 久宗百合子
深谷公子 堀内洋子 藤野尚子
古谷都紀子 堀内洋子 益田明美
松下真佐子 松本彰雄 三股恵美子
三股まさ子 宮内貞子 宮澤玲子
宮本政明 毛利亮子 森島子
山田久美子 吉田亜希 依田良子
鶴崎祥子 吉岡眞紀子
学校法人まきば幼稚園
東洋英和女学院 同窓会
在日本南ブレスビテリアンミッション
親子わくわくピクニック実行委員会
保養プロジェクト@あおもり
新湯 YWCA
匿名

(カーロスポート募金)

カーロスポート募金 59件

(2021年10月16日〜12月15日
敬称略)